

前  
入 学 試 験 問 題  
国 語 (文科)

(配点一二〇点)

平成二十六年二月二十五日 九時三〇分～一二時

注 意 事 項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で二十三ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(表面二箇所、裏面一箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用にしてもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 十、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。



草稿用紙 (切り離さないで用いよ。)



多くの観衆の前でたくさん期待の視線にさらされる落語家の孤独。たったひとりの患者の前でその人生を賭けた期待にさらされる分析家の孤独。どちらがたいへんかはわからない。いずれにせよ、彼らは自分をゆすぶるほど大きなもの前でたったひとりで事態に向き合い、そこを生き残り、なお何らかの成果を生み出すことが要求されている。それに失敗することは、自分の人生が微妙に、しかし確実に<sup>c</sup>オビヤカされることを意味する。客が来なくなる。患者が来なくなる。

おそらくこの<sup>a</sup>ところを凍らせるような孤独のなかで満足な仕事ができるためには、ある文化を内在化して、それに内側からしっかりと抱えられる必要がある。濃密な長期間の修業、パーソナルで<sup>d</sup>ジョウシヨ的なものを巻き込んだ修業の過程は、それに役立つているだろう。落語家も分析家も文化と伝統に抱かれて仕事をする。しかし、そうした内側の文化がそのまま通用することは、落語でも精神分析でもありえない。ただ、根多を覚えたとおりにやっても落語にはならないし、理論の教えるとおりに解釈をしても精神分析にはならない。観客と患者という他者を相手にしているからだ。

演劇などのパフォーマンスアートにはすべて、何かを演じようとする自分と見る観客を喜ばせようとする自分の分裂が存在する。それは「演じている自分」とそれを「見る自分」の分裂であり、世阿弥が「離見の見」として概念化したものである。落語、特に古典落語においては、習い覚えた根多の様式を踏まえて演<sup>e</sup>りながら、たとえばこれから自分が発するくすぐりをいま目の前にいる観客の視点からみる作業を不断に繰り返す必要がある。昨日大いに観客を笑わせたくすぐりが今日受けるとは限らない。彼はいったん今日の観客になって、演じる自分を見る必要がある。完全に異質な自分と自分との対話が必要なのである。

しかも落語という話芸には、他のパフォーマンスアートにはない、さらに異なった次元の分裂の<sup>e</sup>ケイキがはらまれている。それは落語が直接話法の話芸であることによる。落語というものは講談のように話者の視点から語る語り物ではない。言ってみれば地の文がなく、基本的に会話だけで構成されている。端的に言つて、落語はひとり芝居である。演者は根多のなかの人物に瞬間瞬間に同一化する。根多に登場する人物たちは、おたがいにはげたり、つつこんだり、だましたり、ひっかけたりし合っている。そうしたことが成立するには、おたがいがおたがいの意図を知らない複数の他者としてその人物たちがそこに現れなければならない。落語が生き生きと観客に体験されるためには、この他者性を演者が徹底的に維持することが必要である。<sup>f</sup>落語家の自己はたがい

他者性を帯びた何人もの他者たちによって占められ、分裂する。私の見るところ、優れた落語家のパフォーマンスには、この他者性の維持による生きた対話の運動の心地よさが不可欠である。それはある種のリアリティを私たちに供給し、そのリアリティの手ごたえの背景でくすぐりやギャグがきまるのである。

おそらく落語という話芸のユニークさは、こうした分裂のあり方にある。もつと言えば、そうした分裂を楽しんで演じている落語家を見る楽しみが、落語というものを観る喜びの中核にあるのだと思う。そして、人間が本質的に分裂していることこそ、精神分析の基本的想定である。意識と無意識でもいい、自我と超自我とエスでもいい、精神病部分と非精神病部分でもいい、本当の自己と偽りの自己でもいい、自己のなかに自律的に作動する複数の自己があつて、それらの対話と交流のなかにひとまとまりの「私」というある種の錯覚が生成される。それが精神分析の基本的な人間理解のひとつである。落語を観る観客はそうした自分自身の本来的な分裂を、生き生きとした形で外から眺めて楽しむことができるのである。分裂しながらも、ひとりの落語家として生きていく人間を見ることに、何か希望のようなものを体験するのである。

エ 精神分析家の仕事も実は分裂に彩られている。分析家が患者の一部分になることを通じて患者を理解することを前に述べた。たとえば、このころのなかに激しく自分を迫害する誰かとそれにおびえてなすすべもない無力な自分という世界をもっている患者は、分析家に期待しながらも、迫害されることにおびえて、分析家を遠ざけ絶えず疑惑の目を向け拒絶的になる。分析家はやがてそのような患者を疎ましく感じ、苛立ち、ついに患者に微妙につらく当たるようになる。こうした過程を通して分析家はまさに患者のこのころのなかの迫害者になつてしまふ。さらに別のことも起きる。分析家は何を言つても患者にはねかえされ、どうしようもないと感じ、なすすべもない無力感を味わう。それは患者のこのころのなかの無力な自己になつてしまったということである。こうして患者のこのころの世界が精神分析状況のなかに具体的に姿を現し、分析家は患者の自己の複数の部分に同時になつてしまい、その自己は分裂する。

もちろん、そうして自分でないものになつてしまふだけでは、精神分析の仕事はできない。分析家はいつかは、分析家自身の視点から事態を眺め、そうした患者の世界を理解することができなければならない。そうした理解の結果、分析家は何かを伝える。

そうして伝えられる患者理解の言葉、物語、すなわち解釈というものに患者は癒いされる部分があるが、おそらくそれだけではな  
い。分裂から一瞬立ち直って自分を別の視点から見ることができ生オきた人間としての分析家自身のあり方こそが、患者に希望を  
与えてもいるのだろう。自分はこのころのなかの誰かにただ無自覚にふりまわされ、突き動かされていなくてもいいのかもしれない。  
ひとりのパーソナルな欲望と思考をもつひとりの人間、自律的な存在でありうるかもしれないのだ。

（藤山直樹『落語の国の精神分析』）

〔注〕 ○根多——「種」を逆読みにした語。

○くすぐり——本筋と直接関係なく挿入される諧謔かいぎやく。

○自我と超自我とエス——フロイト(Sigmund Freud 一八五六～一九三九)によって精神分析に導入された、自己に関する概念。

設問

- (一) 「このところを凍らせるような孤独」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (二) 「落語家の自己はたがいに他者性を帯びた何人もの他者たちによって占められ、分裂する」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「ひとまとまりの「私」というある種の錯覚」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
- (四) 「精神分析家の仕事も実は分裂に彩られている」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。
- (五) 「生きた人間としての分析家自身のあり方こそが、患者に希望を与えてもいる」(傍線部オ)とあるが、なぜそういえるのか、落語家との共通性にふれながら一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。
- (六) 傍線 a、b、c、d、e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。
- a カセ(いで)      b ナグサ(め)      c オビヤ(かされる)      d ジョウシヨ  
e ケイキ





## 第二 一 問

次の文章は、井原西鶴の『世間胸算用』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

分限ぶんげんになりける者は、その生まれつき格別なり。ある人の息子むすこ、九歳より十二歳の暮れまで、手習てならひにつかはしけるに、その間の筆ふでの軸を集め、そのほか人の捨てたるをも取りためて、ほどなく十三の春、我が手細工てさいくにして軸簾ぢくすだれをこしらへ、一つを一寸五分づつの、三つまで売り払ひ、はじめて銀四匁五分まうけしこと、我が子ながらただものにあらずと、親の身にしては嬉しさのあまりに、手習の師匠に語りければ、師の坊、このことをよしとは誉めたまはず。「我われ、この年まで、数百人子供を預かりて、指南なんいたして見およびしに、その方の一子のごとく、氣アのはたらき過ぎたる子供の、末に分限に世を暮らしたるためしなし。また、乞食こじきするほどの身代しんたいにもならぬもの、中分ちゆうぶんより下の渡世とせをするものなり。かかることには、さまざまの子細あることなり。そなたの子ばかりを、かしこきやうに思しめすな。それよりは、手イまはしのかしこき子供あり。我が当番の日はいふにおよばず、人の番の日も、箒はき取りどり座敷掃きて、あまたの子供が毎日つかひ捨てたる反古ほんこのまろめたるを、一枚一枚いちまいのばして、日ごとに屏風びやうぶ屋へ売りに帰るもあり。これは、筆の軸を簾の思ひつきよりは、当分の用に立つことながら、これもよろしからず。またある子は、紙の余慶持ち来たりて、紙つかひ過ウして不自由なる子供に、一日一倍ましの利にてこれを貸し、年中に積もりての徳、何ほどといふ限りもなし。これらは皆、それぞれの親のせちがしこき氣を見習ひ、自然と出るおのれおのれが知恵にはあらず。その中にもひとりの子は、父母の朝夕てうせき仰せられしは、『ほかのことなく、手習を精に入れよ。成人してのその身のためになること』との言葉、反古エにはなりがたしと、明け暮れ読み書きに油断なく、後には兄弟あいでし子どもにすぐれて能書になりぬ。この心からは、ゆくすゑ分限になる所見えたり。その子細は、一筋に家業かせぐ故ユなり。惣そうじて親よりし続きたる家職のほかに、商売を替へてし続きたるはまれなり。手習てならひ子どもも、おのれが役目カの手を書くことはほかになし、若年じやくねんの時よりすすどく、無用の欲心なり。それゆゑ、

第一の、手は書かざることのあさまし。その子なれども、さやうの心入れ、よき事とはいひがたし。とかく少年の時は、花をむしり、紙鳥いがかをのぼし、知恵付時ちゑつけときに身を持ちかためたるこそ、道の常なれ。七十になる者の申せしこと、ゆくすゑを見給へ」と言ひ置かれし。

〔注〕 ○分限——裕福なこと。金持ち。

○一匁五分——一匁は約三・七五グラム。五分はその半分。ここは銀貨の重さを表している。

○屏風屋へ売りて——屏風の下張り用の紙として売る。

○当分の用に立つ——すぐに役に立つ。

○紙の余慶——余分の紙。

○すすどく——鋭く抜け目がなく。

○紙鳥——たき。凧。

設問

- (一) 傍線部ア・エ・カを現代語訳せよ。
- (二) 「手まはしのかしこき子供」(傍線部イ)とは、どのような子供のことか。
- (三) 手習の師匠は、「これらは皆、それぞれの親のせちがしこき気を見習ひ、自然と出るおのれおのれが知恵にはあらず」(傍線部ウ)と言っているが、これは軸簾を思いついた子の父親のどのような考えを戒めたものか。
- (四) 手習の師匠が、手習に専念した子供について、「この心からは、ゆくすゑ分限になる所見えたり」(傍線部オ)と評したのはなぜか。
- (五) 「とにかく少年の時は、花をむしり、紙烏をのぼし、知恵付時に身を持ちかためたるこそ、道の常なれ」(傍線部キ)という手習の師匠の言葉の要点を簡約にのべよ。

草稿用紙  
(切り離さないで用いよ。)

第三問

次の文章は、唐の太宗と長孫皇后についての逸話である。これを読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で返り点および送り仮名を省いたところがある。

長樂公主將<sub>ニ</sub>出降<sub>一</sub>。上<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>公主<sub>ハ</sub>皇后<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>生<sub>ム</sub>、特<sub>ニ</sub>愛<sub>シ</sub>之<sub>ヲ</sub>、勅<sub>ニ</sub>有司<sub>一</sub>資

送<sub>スルコト</sub>倍<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>永嘉長公主<sub>一</sub>。魏徵諫曰、「昔漢明帝欲<sub>レ</sub>封<sub>ニ</sub>皇子<sub>一</sub>曰、「我

子豈得<sub>下</sub>与<sub>ニ</sub>先帝子<sub>一</sub>比<sub>上</sub>。皆令<sub>レ</sub>半<sub>ニ</sub>楚・淮陽<sub>一</sub>。今資<sub>コト</sub>送<sub>スルコト</sub>公主<sub>ニ</sub>倍<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>長

主<sub>ニ</sub>得<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>異<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>明帝之意<sub>一</sub>乎。上然<sub>ニ</sub>其言<sub>一</sub>、入<sub>リテ</sub>告<sub>ニ</sub>皇后<sub>一</sub>。后嘆曰、「

妾亟聞<sub>ニ</sub>陛下<sub>一</sub>称<sub>コト</sub>重<sub>スルヲ</sub>魏徵<sub>ヲ</sub>不知<sub>ニ</sub>其故<sub>一</sub>。今觀<sub>下</sub>其引<sub>ニ</sub>礼義<sub>一</sub>以<sub>テ</sub>抑<sub>中</sub>人主之

情<sub>上</sub>、乃知<sub>ニ</sub>真社稷之臣<sub>一</sub>也。妾与<sub>ニ</sub>陛下<sub>一</sub>結<sub>シテ</sub>髮<sub>ヲ</sub>為<sub>ニ</sub>夫婦<sub>一</sub>、曲<sub>ク</sub>承<sub>ニ</sub>恩礼<sub>一</sub>、

每<sub>レ</sub>言<sub>フ</sub>必先<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>顔色<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>敢<sub>テ</sub>輕<sub>ク</sub>犯<sub>ニ</sub>威嚴<sub>一</sub>。況<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>人臣之疎遠<sub>一</sub>、乃能<sub>ク</sub>抗

言スルコト 如シ是ク。陛ク下ノ不レ可ル不レ從ハ。因リテ請フ遣シテ中ニ使ヲ齎モタシテ錢ニ絹ヲ以テ賜フ徵ニ。

上テ嘗カヘリ罷レ朝ヨリ怒リテ曰ク「かならず會ニ須ラク殺ス此ノ田ヲ舍翁」。后フ問フ為レ誰ト。上曰ク「魏ニ徵ニ每ニ」。

廷ハツカシムト辱レ我ヲ。后キテ退キテ具ヘテ朝服立ツ于ニ庭ニ。上キテ驚フ問フ其ノ故ヲ。后曰ク「妾クナラク聞ク主ナレバ明ナレバ」。

臣ナリト直ナリト。今ナリト魏ニ徵ナルハ直ル由ル陛下之ノ明ナルニ故也。妾エ敢テ不レ賀ス。上チ乃チ悦ブ。

〔資治通鑑〕による

〔注〕

○長樂公主——太宗李世民(在位六二六〜六四九)の娘。 ○出降——降嫁すること。

○有司——官吏、役人。 ○資送——送別のとき金銭や財貨を与えること。

○永嘉長公主——高祖李淵(在位六一八〜六二六)の娘。 ○魏徵——唐初の政治家(五八〇〜六四三)。

○楚・淮陽——楚王劉英と淮陽王劉延のこと。 いずれも後漢の光武帝の子、明帝の異母兄弟。

○結髮——結婚すること。 ○中使——天子が派遣した使者。

○朝服——儀式の際に身につける礼服。

設問

- (一) 「得<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>異<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>明帝之意<sub>一</sub>乎」(傍線部 a)を、明帝の意が明らかになるように平易な現代語に訳せ。
- (二) 「今<sub>レ</sub>觀<sub>ニ</sub>其引<sub>ニ</sub>礼義<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>抑<sub>中</sub>人主之情<sub>上</sub>、乃<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>真社稷之臣<sub>一</sub>也」(傍線部 b)を平易な現代語に訳せ。
- (三) 「況<sub>レ</sub>以<sub>ニ</sub>人臣之疎遠<sub>一</sub>、乃能抗言如<sub>レ</sub>是」(傍線部 c)を平易な現代語に訳せ。
- (四) 太宗が怒って「会<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>殺<sub>ニ</sub>此田舍翁<sub>一</sub>」(傍線部 d)と言ったのはなぜか、簡潔に説明せよ。
- (五) 長孫皇后はどのようなことについて「妾敢不<sub>レ</sub>賀」(傍線部 e)と言ったのか、簡潔に説明せよ。



草稿用紙  
(切り離さないで用いよ。)

## 第四問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

仕事の打ち合わせでだれかとはじめて顔を合わせるとき。そんなときには、互いに、見えない触角を伸ばして話題を探すことになる。もともとは苦手だったそういう事柄が、いつからか嫌でなくなり、いまでは愉たのしいひとときにすらなってきた。どのみち避けられないから、嫌ではないはずと自己暗示を掛けているだけかもしれない。いずれにしても、初対面の人と向かい合う時間は、<sup>ア</sup>日常のなかに、ずぶりと差しこまれる。

先日は、理系の人だった。媒体が児童向けで、科学関係の内容を含むためだった。もちろん、それは対話を進めているうちにわかってくることだ。互いに、過不足のない自己紹介をしてから本題に入る、などということは起こらない。相手の話を聞いているうちに、ずいぶん動植物に詳しい人だなという印象が像を結びはじめる。もしかして、理系ですか、と訊きいてみる。

「ええ、そうです。いまの会社に来る前は、環境関係の仕事をしていました。それもあって、いまの仕事でも植物や動物を取材することが多いんです。この前は蓮田はすに行ってきました。蓮根を育てている蓮田です。蓮って、水の中の根がけっこう長いんですよ。思ったよりずっと長くて、びっくり。動物園に行くこともありますよ。撮影にゾウの糞が必要で、ゾウがするまで、じっと待っていたりして」。嬉々ききとして説明してくれる。だれと会うときでも、相手がどんなことにどんなふうに関心をもっているのか、知ることは面白い。自分には思いもよらない事柄を、気に掛けて生きている人がいると知るとは、知らない本のページをめくる瞬間と似ている。

私たちの前にはカフェ・ラテのカップがあった。その飲み物の表面には、模様が描かれていた。その人は、自分のカップの上

へ、首を伸ばすようにした。そして、のぞき見ると「あ、柄が崩れてる」といった。「残念、崩れてる」と繰り返す。私の方は崩れていない。崩れていても一向に構わないので、それならこちらのカップと交換しようと思った瞬間、その人は自分の分を持ち上げて、口をつけた。申し出るタイミングを失う。相手への親近感が湧いてくる。以前から知っている人のような気がしてくる。

「台風の後には、植物園に直行するんです」。相手は、秘密を打ち明けるように声をひそめる。「その植物園には、いろんな種類の松が植わっていて。台風の後には、こんな大きい松ぼっくりが拾えるんです」。両手で大きさを示しながら説明してくれる。「それを、リュックに入れて、もらってくるんです」。いつしよに行行ったわけではないのに、いつか、そんなことがあった気がする。いつしよに、松ぼっくりを拾った気がする。植物園もまた本に似ている。風が荒々しい手つきでめくれば、新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちていく。植物園への道を幾度も通うその人のなかにも、未知の本がある。耳を傾ける。生きている本は開かれないときもある。こちらの言葉が多くなれば、きつと開かれない。

その人の話を、もつと聞いていたいと思った。どんぐりに卵を産みつける虫の名前を、いくつも挙げられるような人なのだ。打ち合わせだから当然、雑談とは別に本題がある。本題が済めば、店を出る。都心の駅。地下道に入ると、神奈川県海岸の話になった。相手は、また特別な箱から秘密を取り出すように、声をひそめた。「あのあたりでは、馬の歯を拾えるんです。海岸に埋められた中世の人骨といつしよに、馬の骨も出てくるんです。中世に、馬をたくさん飼っていたでしょう。だからです。私、拾いましたよ、馬の歯」。

「それ、本当に馬の歯ですか」。思わず問い返す。瞬間、相手は、ううんと唸る。それから「あれは馬です、馬の歯ですよ。本当に、出るんです」。きつぱり答えた。記憶と体験を一点に集める真剣さで、断言した。その口からこぼれる言葉が、一音、一音、遠い浜へ駆けていく。たてがみが流れる。大陸から輸送した陶器のかけらが出るという話題なら珍しくない。事実なのだ。けれど、馬の歯のことは、はじめて聞いた。それから、とくに拾いたいわけではないなと気づく。拾えなくてもいい。ただ、その内容そのものが、はじめて教えられたことだけが帯びるほんやりとした明るさのなかにあって、心ひかれた。

拾えなくていいと思いつながら、馬かどうか、時間が経っても気になる。その人とは、本題についてのやりとりで手いっぱい、馬の歯のことを改めて訊く機会はない。脇へ置いたまま、いつまでも、幻の馬は脇に繫いだままで、別の対話が積み重なって

く。馬なのか、馬だったのか、確かめることはできない。

ある日、吉原幸子の詩集『オンディーヌ』（思潮社、一九七二年）を読んでいた。これまで、吉原幸子のよい読者であったことはないけれど、必要があつて手に取つた。愛、罪、傷など、この詩人の作品について語られるときには必ず出てくる単語が、結局はすべてを表しているように思いながら読み進めるうち、あるページで手がとまった。「虹」という詩。その詩は、次のようにはじまる。

どうしたことか 雨のあとの

立てかけたやうな原っぱの斜面に

ぶたが一匹 草をたべてゐる

電車の速さですぐに遠ざかった

(う)しでもやぎでもうさぎでもなく

あれは たしかにぶただつたらうか

なんとなく笑いを誘う。続きを読んでいくと「こころのない人間／抱擁のない愛——」という言葉が出てきて、作者らしさを感じさせる。周囲に配置される言葉も、その重さのなかでびしりと凍るのだけれど、それでも、第一連には紛れもない可笑しみがあつて、この六行だけでも繰り返し読みたい気もちになる。あれは、なんだつたのだろう。そんなふう<sup>む</sup>に首を傾げて脳裡<sup>のうり</sup>の残像をなぞる瞬間は、日常のなかにいくつも生まれる。多くのことは曖昧<sup>あいまい</sup>なまま消えていく。足元を照らす明確さは、いつでも仮のものなのだ。そして、だからこそ、輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一歩踏み出すことからは、光がこぼれる。その一歩は消えていく光だ。「虹」という詩の終わりの部分を引用しよう。

いま わたしの前に

一枚のまぶしい絵があつて

どこかに 大きな間違ひがあることは

わかつてゐるのに

それがどこなのか どうしてもわからない

消えろ 虹

言葉の上に、苛<sup>いらだ</sup>立ちが流れる。わかることとわからないことのあいだで、途方に暮れるすがたを刻む。鮮度の高い苛<sup>いらだ</sup>立ちがこの詩にはあり、それに触れば、どきりとさせられる。わからないこと、確かめられないことで埋もれている日々<sup>日々</sup>に掛かる虹はどんなだろう。それさえも作者にとつては希望ではない。消えろ、と宣告するのだから。

拾われる馬の歯。それが本当に馬の歯なら、いつ、だれに飼われていたものだろう。どんな毛の色だったか。人を乗せていたであろうか。あるいは荷物を運んだのだろうか。わかることはなにもない。その暗がりのなかで、ただひとつ明らかなのは、これはなんだろう、という疑問形がそこにはあるということだ。問いだけは確かにあるのだ。

問いによって、あらゆるものに近づくことができる。だから、問いと弱さかもしれないけれど、同時に、もっとも遠くへ届く光なのだろう。「馬の歯を拾えるんです」。その言葉を思い出すと、蹄<sup>ひづめ</sup>の音の化石が軽快に宙を駆けまわる。遠くへ行かれそうな気がしてくる。松ぼっくり。馬の歯<sup>エ</sup>。掌<sup>てのひら</sup>にのせて、文字のないそんな詩を読む人もいる。見えない文字がゆっくりと流れていく。

(蜂飼耳「馬の歯」)

設問

- (一) 「日常のなかに、ずぶりと差しこまれる」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (二) 「風が荒々しい手つきでめくれば、新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちている」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「その一步は消えていく光だ」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
- (四) 「掌にのせて、文字のないそんな詩を読む人もいる」(傍線部エ)とはどういうことか、説明せよ。

草稿用紙  
(切り離さないで用いよ。)